

大江健三郎『新しい人よ眼ざめよ』論

——イーヨーと生をめぐる——

片山杜秀人文科学研究会

法学部政治学科 4 年

浅野孝太

大江健三郎は 1935 年生まれで、四国の森の中にある愛媛県の村出身の作家である。現在よりもはるかに活字文化が活発だった時代にデビューし、大きな存在感であり続けた。東京大学仏文科在学中の 1958 年に芥川賞を受賞し、1994 年にはノーベル文学賞を受賞している。国民学校に通う小学生だった 1945 年に敗戦を経験し、新しい憲法にも影響を受け、日本の戦後民主主義を代表する人物として小説執筆にとどまらず核をめぐる発信など文学以外の活動もしてきた。小説「セヴンティーン」やルポルタージュ『ヒロシマ・ノート』などでは政治的なテーマを扱い、セヴンティーン第二部である「政治少年死す」は右翼団体からの脅迫があつて、1961 年の「文學界」発表後 2018 年の全集まで再録・公刊されなかった。また幼少期から言葉に興味を持つと同時に、祖母や母から聞いた村の伝承を、『万延元年のフットボール』『M/T と森のフシギの物語』などのように、後に小説のモチーフとして神話的に描くこともあつた。

2011 年 4 月の講演で大江は「たしかに私には、一生の仕事を振り返ってみて、恋愛小説というものはありません。恋愛ではない、しかし自分には大切な愛というものなら、少しは書いたような気がするけれども」¹ と発言している。これは、鎌倉・九条の会の呼びかけ人の 1 人である井上ひさし死去 1 年のつどいにおける発言で、大江はあらゆる愛から門外漢で長編ですぐれたものを書けないとの 25 歳の井上書いたノートへのコメントであるため、文字通り受け取ることはできないかもしれない。たとえば「個人的な体験」において、鳥と火見子が男女の関係として描かれているともいえるだろう。とはいえ、全編を通した主題が恋愛である小説は書かなかったということならそれは事実かもしれない。そうだとすれば、恋愛ではない要素の中で何が大江文学の魅力か、1983 年刊行の短編連作集『新しい人よ眼ざめよ』から考える。

1963 年に生まれた長男の大江光は、脳に腫瘍があり、障害を抱えながら作曲など音楽活動をしつつ家族に支えられて日常生活を送る。「個人的な体験」でも障害児との共生が描かれており、主人公は苦難の障害を持った息子と生きることを決意している。ノーベル文学賞を受賞した 1994 年には、寄稿したエッセイで「僕の年来のテーマは、言葉によって表現することのきわめて貧しい長男のために」「自分がかかわって表現してやることだった」² と述べている。

また、大学時代に図書館で出会ったブレイクにも影響を受けている。ブレイクは 18 世紀から 19 世紀を生きたイギリスの作家であり、大江は自身の人生と重ねるように感じ取り預言としてのめりこんだ。『新しい人よ眼ざめよ』の連作の短編のタイトルは、すべてブレイクの詩からとられており、障

¹ 講演を加筆修正したブックレットでの内容。大江健三郎「九条を文学の言葉として」『取り返しのつかないものを、取り返すために——大震災と井上ひさし』(岩波書店、2011 年)、42 頁。

² 『読売新聞』1994 年 10 月 14 日、20 頁。

害のある息子イーヨーの発言内容はゴシック体で表記されている。『みすから我が涙をぬぐいたまう日』では「父親」を「あの人」とゴシック表記しており、「僕」にとって「あの人」は一面では「父親」であるとともに、一面では総体としての人間のシンボルであったという³。このような表記は山本(2019)によると、ブレイクの詩「四つのゾア」に登場する究極の人間、真の人間を意味する Man を念頭に置いて表記されている⁴。

そして大江の小説について、私小説という形態も特徴にあげることができる。山本(2019)は、1980年代以降大江が短編の連作に執筆の重点を置くようになったと指摘し、1980年から1982年にかけての「^{レイン・ツリー}雨の木」をモチーフにした連作については「自身を思わせる作家の周囲で起こる出来事を語りながら、「読む」という行為と「書く」という行為を自覚的に小説の中に取り組んでい」と私小説の側面をとらえている⁵。なお、『新しい人よ眼ざめよ』連作第1作は1982年に発表されている。尾崎(2020)は、1982年3月刊の『ピンチランナー調書』(1982年3月刊)の「解説」で、今後の小説では息子との現実生活が直接反映することはないだろうと大江が記していることを、新しい「小説の方法」によって息子との生活を以後、書いていく宣言としている⁶。『新しい人よ眼ざめよ』連作の第3作「落ちる、落ちる、叫びながら……」や第6作「鎖につながれた魂をして」ではプールの描写があるが、大江自身は70歳まで健康維持のためクラブのプールで泳いでいたと語っており⁷、現実と小説の内容がリンクしている。1983年に『新しい人よ眼ざめよ』で大佛次郎賞を受賞した際には、「これは本当の私小説かも知れません」と話したと同時に、「この英詩人を手掛かりにして私生活を作品に表現できた」⁸とブレイクについても述べている。

先述のとおり障害を持った息子光は1963年に生まれている。榎本(1995)は、赤んぼうを見捨てる「空の怪物アグイー」(初出は『新潮』1964年1月号)と、育てていく決心をした『個人的な体験』(1964年刊行)では、ともに人生最大の選択を前に追い込まれた自己を救済する目的で、赤んぼうは父親の属体として位置づけられると指摘している⁹。それに対して『新しい人よ眼ざめよ』では息子の幼年、少年期から20歳という時間軸で物語が進む。なお、障害のある息子のことを、『新しい人よ眼ざめよ』では「イーヨー」と渾名^{あだな}で呼ぶ¹⁰。

第1作は「^{むく}無垢の歌、^{けん}経験の歌」(初出は『群像』1982年7月号)である。テレビチームとのヨーロッパ旅行で父親の「僕」が不在の家庭内では、イーヨーが荒れてしまい妻や弟、妹が恐怖を感じていた。養護学校の集まりで鬼ごっこをした際に、鬼の息子が母親を足払いで倒し、「僕」の妻は^{のうしんどう}脳震盪でしばらく立ち上がれないほどだった。また家では、庖丁を持って裏庭をのぞき続け、妻が

³ 大江健三郎『新しい人よ眼ざめよ』(講談社、1986年)、145頁。

⁴ 山本昭宏『大江健三郎とその時代——「戦後」に選ばれた小説家』(人文書院、2019年)、171頁。

⁵ 山本 前掲書(2019年)、241頁。

⁶ 尾崎真理子『大江健三郎全小説全解説』(講談社、2020年)、135頁。

⁷ 大江健三郎 尾崎真理子『大江健三郎 作家自身を語る』(新潮社、2007年)、287頁。

⁸ 『朝日新聞』朝刊1983年10月1日、13頁。

⁹ 榎本正樹『大江健三郎の八〇年代』(彩流社、1995年)、99-101頁。

¹⁰ 大江 前掲書(1986年)、14頁。そのほか「ジン」「アカリ」など、小説によって、いくつかの呼び方がある。

父親が帰ってきたらいいつけるという「いいえ、いいえ、パパは死んでしまいました！」と叫んだ。妻が、父親は旅行中だと説明しても「**そうですか、来週の日曜日に帰ってきますか？ そのときは帰ってきても、いまパパは死んでしまいましたよ！**」と続け、妻は疲労困憊^{こんぱい}してしまった。実際に夫が死んでしまった将来、障害のある息子を統制するためにまだ父親は死んでいないといいくるめるような事態にかさねたからである。しかしイーヨーは、父である夫の「僕」が帰国した翌朝、「**足、大丈夫か？ 善い足、善い足！**」と父の足をさすった。そして昨夜は放り出したままだったハーモニカで和音を試しはじめた。このことを受けて、「僕」は「この世界の何もかもを定義してやると、イーヨーにいつてきたんだがな」「いまのところ、いちばん確かだったのは足の定義で、それも僕の発明というよりは、痛風のおかげで定義できたわけだ……」と妻に話した。以前公開の場で障害児学級の子供¹¹ たちがこの世界で生きていくためのハンド・ブックを書きたいと話したものの、養護学校高等科二年に進もうとしている息子に対して確実に定義できたのは、善い足についてで、それもかつて痛風の発作を起こしたことに由来しているだけだと顧みる。

「僕」は不在中のイーヨーの行動について、父親が遠くへ行ってしまう、彼の感情の経験としては死んだと同然で、その上ゲームとはいえ母親までが自分を残して逃げ出そうとすれば逆上すると考える。庖丁も防御的で、父親の死後、代わりに家族を守ろうと外敵を見張っているつもりだったのではと分析した。そして同時に、「僕」の死後息子が生の道に踏み迷うことのない定義集を書くことを決意する。

第2作の「怒りの大気に冷たい^{えいじ}嬰兒が立ちあがって」(初出は『新潮』1982年9月号)では、死の定義をめぐって、自らが幼いころ谷間の村でウグイを追いかけて川で水死しかけた記憶と、生後二箇月半の息子の後頭部の瘤の手術の頃を懐古する。はじめての癲癇の発作から数日後の場面では、音楽界の老大家の死というテレビのニュースに反応し、イーヨーは「**あーっ、死んでしまいました、あの人は死んでしまった！**」と叫び、両手で顔をおさえこみ全身をこわばらせた。同じころ、FM放送を聞くイーヨーに対して妹が「すこしだけ音を小さくしてね」と頼んだときには、イーヨーは荒あらしく威嚇の身ぶりを示して妹をすくみこませた。妻が「だめでしょう、そういうことをしては！」「私たちが死んでしまった後は、妹と弟の世話にならなければならないのよ。いまみたいなことをしていたら、みんなから嫌われてしまうわ。そうなったらどうするの？ 私たちが死んでしまった後、どうやって暮すの？」と両親の決まり文句を言うと、「**大丈夫ですよ！ 僕は死ぬから！ 僕はすぐに死にますから、大丈夫ですよ！**」と新しい応答をした。その後、妹は「あのようにいうことは、良くないと思う。イーヨーは将来のことを考えて、寂しいよ」と、弟はイーヨーが涙を指で拭いていたと言い、妻と「僕」は幾たびとなく繰り返した言葉に、自分自身を恥じてしよげこんだ。

イーヨーは朝刊やテレビで新しい病名の物故者を見るたび朗唱するようになり、死の概念が息子に住みついたと「僕」は認識した。その後、イーヨーは通院している大学病院からの帰りのタクシーで、「**そうなんですよ！ 僕には脳がふたつもありました！ しかし、いまはひとつです。ママ、僕のもうひとつの脳、どこへ行ったんでしょうね？**」と発言し、自らの脳分離症を理解した様子をみせる。

¹¹ 小説内の表記に従い「子供」とする。

第3作の「落ちる、落ちる、叫びながら……」(初出は『文藝春秋』1983年1月号)は、中学生の息子に泳ぎを教えよう通っていたクラブの場面である。深いプールに沈んで溺れかけたイーヨーは、クラブに来ている青年集団の統率者に救われる。この人物の、事故で指を切断した足について、生々しい描写が何度もみられる。助かったイーヨーは帰路、「いいえ、すっかりなりましたよ!」「僕は沈みました。これからは泳ぐことにしよう。僕はもう泳ごうと思います!」と父に答えた。

第4作の「蚤^{のみ}の幽霊」(初出は『新潮』1983年1月号)では、自決した作家の「Mさん」と「僕」について修士論文を書いているアメリカ人女子学生が訪れる。「Mさん」について、イーヨーが「本当に背の低い人でしたよ、これくらいの人間でした!」と床から三十センチほどの高さに掌をさしのべた。陸上自衛隊^{ちんじゆう}に闖入し割腹自殺した「Mさん」の、床に直立した血まみれの生首の、十年以上前の新聞写真を記憶していたのである。こういった悪い夢を取り除きたい「僕」であったが、イーヨーが夢というものがいったいなにをさすかわかっていないようだ困惑する。

またある日、出かけようとしていた別荘である伊豆の山荘に行く予定だったが、台風のため、あきらめることにした。「僕」は、イーヨーが話を聞いてとくに反応を示さなかったため、かれにとって山荘行きがそれほど重要ではなかったと判断した。しかし当日になって、イーヨーは山荘へ行く準備をして、またしても妻に「いいえ、パパは死んでしまいました! 死んでしまいましたよ! 僕はひとりで伊豆へまいろうと思います! パパは死んだのですから! みなさん、ご機嫌よう、さようなら!」と喋りかかない姿勢をみせた。家族の誰も伊豆に行かないといわれると、イーヨーは物置にあった汚れた古人形「チョチャン」を胴にゆわえつけるほどだった。そのため「僕」は行くことを決める。弟が着いていこうとするのに対して、妻が「二人だけよりは、もうひとり一緒に行ったほうがいいわね……」と不安を口にしたが、「僕」は「いや、僕とイーヨーの二人で行く」と弟を傷つける殴打のようであるのを自覚しながらいった。「僕」が五十近い僕になお子供じみたところが残っていて、自分自身のための定義にも熱心ではなかったと反省する場面もある。嵐の中、山荘に着いてから、酔っぱらい半ば眠っていた「僕」に、イーヨーは「大丈夫ですよ、大丈夫ですよ! 夢だから、夢を見ているんだから! なんにも、ぜんぜん怖くありません! 夢ですから!」と声をかけた。弟の発案で妻も妹も翌朝山荘に到着し、「僕」は妻に「イーヨーは夢を見ないが、夢を見る人間がいるということは知っているよ」と、イーヨーが年をとって夢を見るようになっても夢だと判断できるという収穫を語った。

第5作「魂が星のように降って、跗^{あし}骨のところへ」(初出は『群像』1983年3月号)では、イーヨーと「僕」との、コミュニケーションの手続きが説明される。イーヨーは鳥の声を聞き、その鳥の名前を識別して「クロツグミ、ですよ」などというのである。小学校特殊学級入学直前の時期で、目の障害を持っているイーヨーは、当時矯正の眼鏡をかけていなかったため、鳥の実体ではなく信号としての鳥の声であったが、コミュニケーションは成立したと「僕」はみなしていた。また、家に来た韓国人の娘とイーヨーがピアノで遊んで以来、朝鮮民謡のメロディーに「ヘナーンニモイラナイヨ、イーヨーガイルカラ!」と「僕」が歌詞をつけ、歌い終わるとイーヨーが「ありがとうございます!」と応答する手続きもある。これは「認知」の合図としての役割を持ったという。もうひとつ、「僕」が「1、2、3、4、…」と数えはじめ動作をさせる手続きがあり、だんだん数を数える声に苛立ちがあらわれる「懲罰」

の意思が明らかなものである。これに対しては、知恵遅れの息子の反抗を世間体をおもんばかり（原文ママ）つつ擬装しておさえこむ「無残な圧制者」のように感じていたと「僕」は吐露している。

イーヨーは小学三年の春に T 先生からピアノを習いはじめ、やがて作曲をするようになる。T 先生はピアノの技術の熟達をもとめず、音楽を通じてコミュニケーションの道を開く授業をした。

「僕」は、障害児は核兵器をつくり行使する側には立たぬ者らで、最も被害に斃れやすい者らであるからかれらには核兵器に反対する権利が正当にあると考えている。その一方で、重症の障害児に悲惨な現実を希望に転換するよう期待するのは困難すぎる荷を担わせることになるとも感じ、「僕」自身悲惨の認識を希望の見通しにつなぐ装置を作りえていないのではと認識させた。

心身障害児の施設から音楽劇の依頼がありイーヨーは作曲を担当することになった。この過程で、編曲のやり直しに乗り気でないイーヨーにとって、音楽劇の作曲が音楽的な創作であり、その本質に由来する楽しみと集中があったことを知る。そして、障害を持った子供らが自分らの障害を前面に押し出すようにして、そのまま舞台上で劇の本番に、「僕」は勇ましいほどの勢いや迫力を感じた。舞台上でガリヴァーの足の張りばての中でプロンプターの役割をやりとげたイーヨーは、出てくるよう促されたが、「僕は足のなかにいようと思います、ありがとうございました！」と応え、会場では好意的な大きな笑い声が沸き上がった。

第 6 作「鎖につながれたる魂をして」（初出は『文學界』1983 年 4 月号）では、職業訓練として福祉作業所に通うようになる。生まれてはじめて社会生活に参加するにあたり、妻は「F さん」からもらった憲法のパンフレットをイーヨーの作業衣に入れた。この「F さん」とは、沖縄の施政権返還運動の活動家であり、すでに死者となっている。かつて妻が障害児の親は一日でも永く生きて面倒を見ることができたらと口にしたときには、「そのような考え方は、だめですよ。敗北主義ですから」と言い、困ったことがあれば障害児が憲法パンフレットを出すだけですべて解決する社会を実現しなければ、めざさなければ敗北主義だと語った。

養護学校で障害児の死がつかえられたときには、バザーの準備をしていた若い母親が「希望者だけいくことにしましょう、おめでたいことなだから！」と言う。「僕」は、批判の感情をもってではなく共有するある傷ましさを思いとともに、この言葉を頭の中で旋回させていた妻に、忘れてしまった方がいいと声をかけた。

イーヨーが十歳のころ、障害児の息子を生活の中心にすえて政治闘争に本気で乗り出さないことは特権的だと、「僕」を非難する学生二人が自宅を訪ねる。後日この学生によって、学校の帰りにイーヨーは誘拐され、東京駅で置き去りにされていたところを「僕」が発見した。今年の正月休み明けになって、宗教集団で活動しているというこの人物から電話がかかってきた。電話に出た妻は、連れ戻すことが難しくなったかもしれない、ひどいことをしたと糾弾した。ところがその人物は「その方が良かったのじゃないですか」「障害のある子に生産性はないですよ」と切り返したという。「僕」は、この学生によるイーヨーの評価には「くみせぬが、この十年、いや誕生以来の年月を考えれば二十年、イーヨーの存在に妻ともども縛りつけられてきたというならば、それはそのとおりにちがいない」との認識を示す。夜になって二度目の電話がかかってくると、電話の前に陣どっていたイーヨーが、受話器に腕を伸ばそうとする「僕」に、「ウム！」と唸り声をあげて体当たりを喰らわせてきた。受

話器をとったイーヨーは、日ごろよりもさらに強い力をこめて「あなたは悪い人です！ どうして笑っているのか？ もう話すことはできない！ ぜんぜん、なんにもできません！」と言った。覚えていて怒っていることに、発作が起るかもしれないし、ひとを傷つけるかもしれないと心配する妻に、イーヨーは「僕はずっと覚えていました！ あの人は悪い人でした！ しかし、ママ、心配はいりません！ もう僕は怒らないですよ！ もう悪い人はぜんぜんいませんから！」と言い、確信に満ちた感謝の響きすら感じられたという。

しめくりの第7作「新しい人よ眼ざめよ」(初出は『新潮』1983年6月号)は、作家の視点から初めて連作形式で書かれた1982年刊の長編『雨の木を聴く女たち』、さらには1979年の大長編『同時代ゲーム』の作者としての解説、という前提で進む。イーヨーが通う養護学校では1学期ずつ寄宿舎に入る規則であり、イーヨーは「寄宿舎に入る順番になりました！ 準備はできておりますか？ 来週の水曜日に入ることになっております！」「しかし僕がいない間、パパは大丈夫でしょうか？ パパはこのピンチを、またよく切りぬけるでしょうか？」と報告した。「僕」からこの前のピンチとはいつだったのかときかされると、イーヨーは「それはHさんが、白血病で亡くなった時でした！ サクちゃんは、小児癌だったし！ ああ、恐しかったものだなあ！ パパはよく切りぬけました！ ご苦労さまでした！ 三年前の、一月二十五日前後の、一週間のピンチでございました！」と答えた。イーヨーの弟のサクちゃんは検査の結果小児癌ではなかったのであり、同時期に同級生の「H君」が死んで、葬儀の責任者の役割を「僕」が引受けた。この夜の食事の際、「僕」は、もし腎臓を摘出しなければならぬなら、「僕」かママかイーヨーの腎臓を、ひとつ移植する相談をしていたが誰の腎臓をもらうつもりだったか弟に聞いた。弟は考えながら「イーヨーは「ヒダントール」をのんでいるからね」と答えた。「僕」はエゴイスチックな選択じゃないかとムツとしたが、弟の本意は抗てんかん剤を処理するには腎臓がふたつ必要だろうというもので、誤解していた「僕」はあやまった。

食事の後には、寄宿舎へ持っていく音楽を選びだせないイーヨーに妻が「能率よくしなければ、寄宿舎でみんなに迷惑をかけるよ」と注意した。しかし妹が「イーヨーには全体が音楽なのだから、なにかそこから選ぶという事はできないのじゃない？」と言い、イーヨーは「そうです、そのとおりですよ！ ありがとうございます！」と反応した。寄宿舎入りがまちかで両親の関心がイーヨーに集中しており、弟と妹は、とくに父親から無視されていると感じるところがあったらしい。寄宿舎入り二日前には弟が、イーヨーが滑稽なことをするからみんなが笑ってきたのではなく、何でもないことでもイーヨーがみんなが笑うように元気をつけたのだから、イーヨーが寄宿舎に入ったら自分たちはあまり笑わなくなるだろうといった。二日後にはもうそこで寝ていないイーヨーをのぞき込む「僕」に対し、イーヨーは「パパ、よく眠れませんか？ 僕がいなくなっても、眠れるかな？ 元気をだして眠っていただきます！」と穏やかな声をかけてきた。

入舎式のあとで、都の障害児の親の会の役員である老婦人から、子供が舎に入っていた一学期間がはじめての休暇で、最後の休暇であったように思うと妻は声をかけられた。それに対して妻は、「イーヨーと生活していることは、ちょうど二人分生きているということだから」と自分のこととして、それも明るく開放されている休暇中の人間の声で答える。

最初の帰省で家に帰ってくると、イーヨーは「善い足、善い足、大丈夫だったか？ お元気でした

か？」と「僕」の左足を揺さぶって挨拶した。夕御飯だよと呼ばれると「イーヨーは、そちらへまいりません！ イーヨーは、もう居ないので、ぜんぜん、イーヨーはみんなのところへ行くことはできません！」と決意表明した。「今年の六月で二十歳になるから、もうイーヨーとは呼ばれたくないのじゃないか？ 自分の本当の名前で呼ばれたいのだと思うよ。寄宿舎では、みんなそうしているのでしょうか？」と考えた、行動家である弟はイーヨーの脇にしゃがみこみ「光さん、夕御飯を食べよう。いろいろママが作ったからね」と話しかけた。「はい、そういたしましょう！ ありがとうございますました！」の声に、妻と妹は、笑い声をあげていた。「僕」は呼び方の変化を惜しみつつも、「きみ、光と、そしてすぐにもきみの弟、桜麻とが、ふたりの若者としてわれわれの前に立つことになるだろう」「新時代の若者としての息子らの——その脇に、もうひとりの若者として、再生した僕自身が立っているようにも感じたのだ」との思いを表す。

まず、第1作から死をどうとらえるかがテーマとなっており、連作ではイーヨーが徐々に死や夢を認識していく様子が描かれている。そして「僕」の目的は、小説を通して、障害のあるイーヨーが生きていけるよう定義集をつくることとしているが、結局定義できたのは足についてだけだった。しかも「僕」が痛風になったおかげで、イーヨーが理解できたのである。とはいえ、連作の第1、3、5、7作で足の描写が目立っており、足だけでも定義できたことが「僕」にとって大きな意味を持っているといえる。

最後の第7作では、養護学校の寄宿舎生活を経験したイーヨーが、「イーヨー」ではなく「光」と呼ばれることを求める。この呼び方の変化によって、他人に手を借りるだけの「イーヨー」は居なくなり一度死んで、自立的に生きていける「光」へ成長すると受け取れる。つまり、この作品における「死」とは、成長・変化を意味すると考えられる。

尾崎(2020)によれば、実際の大江光のピアノの先生である田村久美子は、ほとんど言葉で表現しない光が作曲した作品について、胸にこみあげてくるような表情をもち、なぐさめるような優しい響きになっていると評している¹²。小説での障害のある息子をめぐっては、時間を経て『晩年様式集』(2013年刊行)で音楽を通した成長が完成し、社会的には弱い立場である障害者であっても明るく生きていけることを主題としている。

さらに小説のなかでは、イーヨーだけでなく弟と妹の成長も描かれている。親である「僕」や妻よりもイーヨーと理解しあっていくのである。障害のある息子をはじめ、家族の様子を入念に観察し、生々しくリアリティを持って明るく描写することで、家族の絆も感じさせる。哲学者の鶴見俊輔は文庫化に際しての「解説」で、「この小説は、主として主人公の家庭の内部をえがきながら、一九八〇年代からさらに暗いふたしかな未来にむけて生きる新しい人に向けて書かれた社会小説である」「未来に生きる新しい人のわきに、もうひとりの若者として再生する自分を絶たせる、その創造の中に、主人公はみずからの家庭をおき、世界をおく」と分析している¹³。

苦悩を経験し悩み抜き努力して乗り越え、成長していく過程を《救済》ととらえると、大江文学の魅力は、前向きに、生きることのすばらしさを伝える《救済》にあるといえる。

¹² 尾崎 前掲書(2020年)、137頁。

¹³ 大江 前掲書(1986年)、314頁。

「僕」と妻をめぐっては、障害児と向き合う心境の変化も描かれている。大江が障害のある息子光を育てる困難も、日常生活や自らの懐かしい記憶の数々をなぞることで、前向きに乗り越え、大江自身の《救済》にもつながっている。

『新しい人よ眼ざめよ』ではイーヨーの成長だけでなく、三島由紀夫を思わせる「先年自殺した高名な作家」「M先生」(連作第3作)や「沖縄の施政権返還運動の活動家」「憲法パンフレット」(連作第6作)など現実の社会、政治的な描写も含まれている。小説にとどまらず政治的な領域にも取り組んできた戦後民主主義者大江には、いかにして生きるかという生への執着が、通底しているといえる。

参考文献等

榎本正樹『大江健三郎の八〇年代』(彩流社、1995年)。

大江健三郎 尾崎真理子『大江健三郎 作家自身を語る』(新潮社、2007年)。

大江健三郎「九条を文学の言葉として」『岩波ブックレット 814 取り返しのつかない物を、取り返すために——大震災と井上ひさし』(岩波書店、2011年)。

尾崎真理子『大江健三郎全小説全解説』(講談社、2020年)。

山崎正純「<悪意>が転移する従順な<僕>の身体：大江健三郎「奇妙な仕事」論」(『言語文化学 研究』第1巻、2016年、pp.25-37)。

山本昭宏『大江健三郎とその時代——「戦後」に選ばれた小説家』(人文書院、2019年)。

『NHK スペシャル 響きあう父と子・大江健三郎と息子 光の30年』(1994年9月18日放送)¹⁴。

¹⁴ NHK アーカイブス(埼玉県川口市)にて視聴。